

私の養鶏随想録

加藤 宏光

非定型的な鶏病

筆者が養鶏業界に初めて接した時には、鶏病用のワクチンも限られており、多くの疾病は教科書に示された通りの症状や病変を呈していたことはすでに述べた。さまざまなワクチンが開発、市販されて、フィールドの条件が整理されたためか、その後に存在が明らかにされた疾病がある。また、新しいSHS（ニューモウイルスという七面鳥のウイルス）やEDS（アヒルのアデノウイルスがニワトリに拡散したもの）などの家きん疾病についてもワクチンが市販され、発現が抑制されるようになってきた。筆者が臨床獣医師としてフィールドに接するようになってから明らかにされた鶏病には以下のようなものがある。

- ①鶏の顔腫れ病（SHS）
- ②鶏雛伝染性貧血症（CA）
- ③EDS（鶏産卵低下症候群）
- ④腎臓型IB
- ⑤鶏インフルエンザ（AI）

これらの中で、⑤を除くすべてにワクチンが開発され市場で入手できる。

また、昔はさほど注目されていなかったが、現在生産性に大きなダメージを与える鶏病としては、クロストリジウム・パーフリンゲンス感染による壊死性腸炎がある。

鶏の伝染性喉頭気管炎（ILT）

筆者が臨床獣医師としての仕事を始めた最初の夏に、ある人がラボとして使っている貸し事

務所を訪ねてきた。話を聞くと、8万羽ほど大ヒナ導入の採卵経営であるが、導入後2週間ほどで顔腫れと呼吸器症状を示して、産卵ピークが80%程度で止まってしまう。それだけでなく、ピーク頃には痩せて死亡する例が続出し、ピークを過ぎる頃には15%以上も減耗する、という。

経営を維持することもできないほどの病状を聞くと

『そのままにはできない』

と思う。早速日程を調整して現場へ出向いた。

現場でロットごとの情報を聞き取った上で、最も若いロットが収容されている鶏舎に入ると、キャッキョッと奇声を上げるもの、喘ぐような開口呼吸など激しい呼吸器症状を示すものがあちこちに散在する。

早速数例の病鶏を解剖してみた。発病後数週間のこのロットでは、解剖した個体すべてで強い病変が確認された。病変はさまざまで、粘膜面に激しい出血を示しているもの、いわゆるチーズ状の偽膜が粘膜状に付着するものが目立つが、ときに気嚢への豆腐滓のような浸出物が確認できる。典型的なILTである。

『これは、ラリンゴ（ILTの通称）ですね』。そう伝えると

『これが、そうですか!!』

と改めてビックリしている。

ILTは筆者をこの業界へ導いた故吉村省吾博士が大阪領域の採卵農場で発見したのが、わが国で初めての報告であり、それから20年近く過ぎたこの時期でもILTの存在を知らないエリアがあることは、西日本地方のフィールドに慣れ親しんだ筆者にとっては驚きと言える。

診断用のサンプルを採取して、直ちにラボへ引き返す時、生産者に

『これからラボへ帰って、すぐに調べます。ILTの診断ができたなら、まだ発症していない大ヒナに直ちにワクチンを接種することにします。たまたま手持ちに1万羽分のワクチンがありますから、それを使うことにしましょう』
そう言い残して、急いでラボへ戻る。

ILTの簡易診断は、気管粘膜上皮細胞の塗抹標本を染色して顕微鏡で細胞核内の封入体を確認することでできる。慣れはいるものの、2時間ほどで診断が可能である。ラボでの細胞診の

結果、ILTであることが明らかとなった。早速手持ちのワクチンを提供して、緊急ワクチネーション実施。以降のロットからの発生を抑えることができたようになった。

それで一件落着ではない。それまでの鶏群はすべてピークが出ないまま、560日齢で淘汰していたのだから、利益どころか大きな赤字を背負いながら運営してきたことになり、これをどう取り戻すかの道筋を検討しなければならない。

8万羽全群に強制換羽

とにかくピークが80%あまりで、その後産卵率は順次低下。アウト前には60%程度の産卵で残存が70~75%では、当時の大ヒナ価格840円を回収していない。そうなれば、強制換羽をトライしてみるしかあるまい。オーナー生産者に『強制換羽を試したことはありますか??』と尋ねると『いいえ』との答。

強制換羽を適用すれば、次の大ヒナ導入を止めることができる。その農場の1ロットは平均1万5000羽。強制換羽を前提にとりあえず1200万~1300万円の資金繰りが容易になる。さらにこれまで稼がないままにアウトしていた古鶏が半年間は稼ぐ。こんな美味しい話はない。筆者はアウト予定の鶏群に強制換羽をかけることを薦めた。そこはプロ、ストーリーを理解した生産者は、アウト前のロットに対して、直ちに強制換羽をテストすることにした。

当時の強制換羽は次のようになされていた。

- 1)断餌は10日（冬季）~2週間（夏季）《ときに断水1日を》
 - 2)餌戻しは20g/羽を3~4日、40g/羽を3~4日、60g/羽を5~6日
 - 3)80g/羽を7~10日、100gで50%産卵まで維持してその後フルに給餌。
 - 4)通常餌切りから45日で50%産卵に至るが、時には55~60日かかることもある。
- というものである。

最初のロットへの強制換羽試験の結果は、断餌と給餌時期に3%あまり死亡し、ピーク産卵率は85~86%、個卵重が67%と大きかったこともあり、日卵重が57g/羽を越えた。なにせ、

最初のピークですら、83%程度である。個卵重が60gに届かないため、日卵重は48~49g/羽であったから、強制換羽の効果は経営者にとって驚くほどのものであった（ちなみに、南東北エリアで強制換羽をかけるケースは50%程度）。この成績に筆者もホッと安堵したものであった。

もっとも、これを機会にこの採卵農場へ定期的に巡回するようになったわけではない。突然の訪問と、たつての依頼でこの農場を訪問したのが、8月の初めで、一件落着が9月の半ば過ぎ。それから年末まではご無沙汰をしてしまった。

どうなったかが気になって訪問したのが、12月の声を聞いてしばらくした頃である。

『その後どうでしょうか?』

と訊ねると

『イヤ~、あのあと全群に強制換羽をやりましてね~。全ロットがそろって生みますから、この農場始まって以来の成績です』

と成績表を見せながら話してくれる。当時もっばら日卵量で成績の是非を判断することが多かったから、全群で55g近い成績をみれば抜群と思える。

しかし、市場を踏まえた運営を考えれば、この方針は大きな問題を引き起こすことに繋がっていた。

現在では30万~40万羽を越えるような大規模採卵養鶏では、GPを併設し、パック卵等の製品を市場へ流すシステムがほとんどである。しかし、40年近く前のこの時代では10万羽（当時としては相当の大規模である）採卵養鶏生産会社でも、原料卵を生産し、流通業界へ出荷するケースが多かった。

原料卵を生産してパックするには、LLからSまで適正なサイズ分布がないと、市場のニーズに応えられない。日本で主流のマルチプル・エージ（日齢傾斜のある複数ロットを飼育するシステム）はサイズの分布を考えても市場への適応がしやすい。しかし、8万羽全群に強制換羽をかけた結果、生産されるすべてのタマゴがL~LL~LLL以上になってしまったのである。

（筆者：㈱ピーピーキューシー代表取締役社長
／農学博士・獣医師）